

主題	ユニット型特養における感染症対策
副題	ノロウイルスなんかには負けない
感染症対応	

研究期間	12ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 多摩の里けやき園
発表者：砂川 陽祐（すながわ ようすけ）		アドバイザー：	
共同研究者：加藤もえ・鈴木恵理・江井希樹			

電話	042-460-8151	メール	m-ei@enseikai.com
FAX	042-460-8152	URL	http://www.enseikai.com/

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成17年に開設しました114名定員のユニット型特養です。全室個室でゆとりのある居住空間を提供しています。「その人らしさを大切に」の法人理念のもと、ご入居者が快適に過ごせるように自立支援を行っています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

当施設では、冬期間の感染症予防の為に、1日1回の全館放送による音楽を合図に、各居室の窓や共用部の窓を開けて「空気入れ替え全館一斉換気」を実施している。

また、次亜塩素酸ナトリウム希釈液を使用し、人が手を触れる手すり・来客用下駄箱・職員用下駄箱・ドアノブ等を消毒、面会者・外部業者・職員が使用する出入り口に関しては毎日1回、ご入居者のいるフロアでは週に2回実施している。

多摩地区での感染性胃腸炎の状況は施設内において、業務申し送りや会議等を通じて、更には啓発を促すポスター等を活用して、職員には周知をしていた。自動手指消毒器も外部からの出入り口、ご入居者の各ユニットも合わせて施設内に19台設置している。また、感染症対策の研修会を年間計画に基づいて実施している。

3階建3フロア12ユニット（1フロア38名）のうち、平成25年1月24日にノロウイルスが原因と思われる感染性胃腸炎の感染者が確認され、その後、ご入居者12名、職員5名（感染疑い者を含む）の感染拡大が見られた。

実際に症状を発見時の正しい処理方法や対応については、会議や研修を通し、職員に周知は行ってはいた。しかし、いざその場に直面した時に感染症疑いのあるご入居者への初動対応が適切な形で実践できなかった事が感染拡大の要因となった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

○全職員の初動対応が正しく行えるようになる事。

○発生後には感染症対策委員会を中心に情報の一元化と施設全体が一丸となって、正しい対応を行う事で、早期終息に繋がる事。

《3. 具体的な取り組みの内容》

ご入居者・職員を含めて17名の感染（疑いも含む）に至って、終息宣言するまでの2週間の取り組みに焦点をあて報告する。

感染性胃腸炎を疑う症状の発生を受けて、施設長指示の下、緊急の施設内感染症対策委員会を開催し、以下の内容を取り決めた。

- ・2階フロアへの面会やご入居者、職員の1階3階フロアへの移動を必要最低限にする。
- ・使い捨て食器の部分使用と大型の衣装ケースを転用して全食器の消毒の実施。
- ・感染症疑いのある方の居室前に備品棚を設置してガウンテクニックを実施。
- ・エリア毎の状況が一目で分かるように「マッピング」を活用し、情報の共有化を図った。

《4. 取り組みの結果と考察》

1、取り組みの結果として

◎他の2フロアに感染拡大する事なく、2階フロアだけに封じ込める事ができた。

◎2週間という短期間で一応の終息宣言を出す事ができた。

2、取り組みの考察として

○職員連絡用大型ホワイトボードを設置し、あらゆる情報をそこに一元管理して有効に活用した事で、以下3点の効果が見られた。

①新しく変更した対応方法の連絡等をシフト勤務で職員が入れ替わっても適切に共有し確実に実施する事ができた。

②日々変化するご入居者の健康状況や職員の体調状況も含めての細かな連絡事項を、時系列で更新しながら情報の管理を行えた。

③自然発生的に職員間で終結に向けての決意として「ノロウイルスなんかには負けない」という標語が生まれて、そこに書き込まれた。職員間にこれまでに感じた事のない一体感を感じる事が出来た。

○ユニット型全室個室という事もあって、症状が疑われる方に居室内安静を協力して頂く事が、多床室中心の従来型特養と比べて容易だった。

○面会を遠慮して頂いた事により、御家族からの不安の声や、いつまで続くのかという問い合わせに対し、職員にとって、早期終結に向けてのモチベーションへと繋がった。

○感染に至らなかった方も含め、ストレス解消法として、普段は活用されていないベランダへの散歩を行う事が大きな気分転換となる事が分った。

《5. まとめ、結論》

初動対応において、嘔吐発見時の適切な対応を、結果として実践できなかった事が感染拡大を招く結果となってしまった。

「どれだけ備えていても感染症は待ってくれない」

感染症対応後にも、適切な備品管理と備蓄の重要性、情報の共有と一元化を行う事が、早期終結への道筋である事も確認できた。

また、入院に至るような重篤な症状のご入居者を出す事無く、比較的、早期に終結を図れた事は、ご家族の心配に思う声を職員が真に受け止め、施設一丸となって感染症をやっつけるという強い団結力の現れであると考えている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本発表にあたっての配慮として、個人情報保護規定に基づき、不特定多数の第三者に個人が特定されるような情報として公開しない事を説明している。

《8. 提案と発信》

人の集まる所、病院・学校・保育所それぞれに感染症の対策について取り組みはあるが、特別養護老人ホームにおいては感染の拡大と重症化が顕著に現れる為、初動対応の重要さが問われる。今回、当施設での取り組みが結果として早期終結に結びついた事で参考になれば幸いです。

【メモ欄】